

〈教育実践報告〉

自然と環境コース1 「浦戸諸島地域誌・生活誌作成委員会」

宮城豊彦

東北学院大学教養学部地域構想学科

I. はじめに：フィールドに学生を入れる
不安と期待

本学地域構想学科の教育で最も特徴的な科目が、2年生を対象とした発展実習であろう。この科目は必修科目として設定している訳ではないが、ほぼ全ての学生が履修し、教員側もそのように奨励している。筆者は、フィールドとキャンパスを言わばデュアルキャンパスとして捉えており、現場に足繁く通い、地域の人々や土地と慣れ親しんでこそ地域に根差した研究が可能になるし、学生たちの社会性も学びの意欲もそこで育まれると考えている。フィールド学者であると自認している筆者は、10年以上継続的に調査を行っている調査地を複数箇所持っている。これらの調査地は何度も訪問を繰り返し、付き合いを深め、双方に資する業績を重ねてきた。浦戸諸島もその一つである。実習とは言え、こうした場所を、学生

に開放するのは多少とも懸念がある。万が一にも非常識な発言や行動をする学生がいて、「地域の方が眉をひそめるようなことが起こりはしないか」「高飛車で独りよがりな行動はしまいか」と心配である。過去には「もう来てくれるな」とこっそり言われたこともある。しかし、その一方で「学院大の学生さんは良いねえ」と声を掛けられることも多い。自分のフィールドを授業で学生に開放するのは結構な賭けでもある。

フィールドに出かけるには相応の準備が必要であると考えている。地域の学問的な課題をシャープに切り取るような研究を行うこともあっていい。しかし、専門分野に進む直前の時期である2年生、半年にわたる継続的な調査行動の最初には、地域という現場に入る作法をしっかりと体得してほしいのである。安溪さんが「フィールド調査に入る前に読む本」で、この作法を主張している。中には存在する、上から目線の学生には「お前な

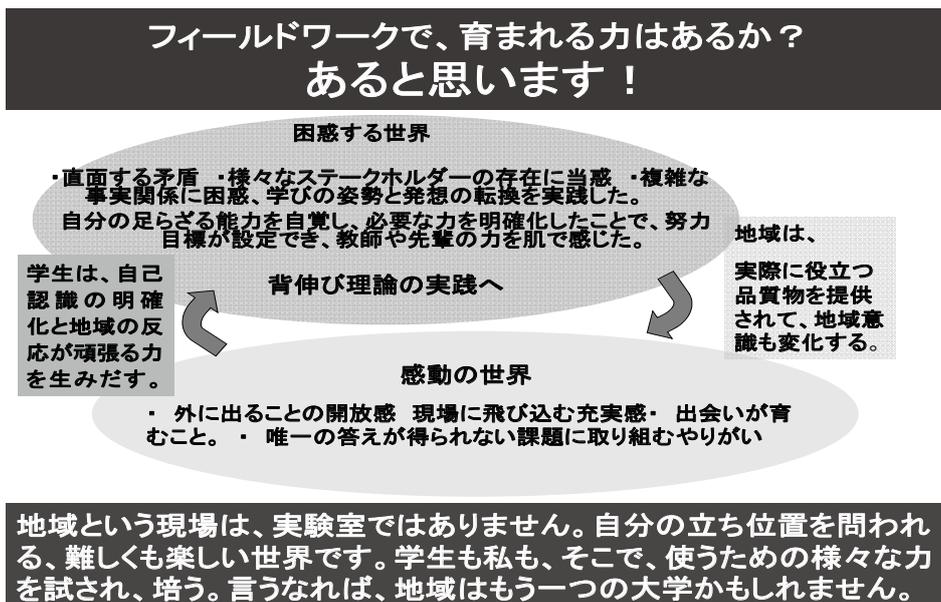


図1 現場に出て、聞き取り調査や観察調査を通じて人と付き合う。其処でどんな力が付くのか

んか来るな！邪魔だ！」と叫びたくなる。我々は基本的に来訪者でしかないのだから、地域と住民に対してはリスペクトする姿勢が必要だ。感受性もそうした姿勢の中で豊かに育まれると信じている。

筆者は、かつて学内のFD研修会のおり、フィールドでの学びの特徴を「学びの背伸び理論」と称して紹介したことがある。現場において当初、学生は様々な挫折を味わう。自らの姿勢や能力の乏しさをいやと言うほど味わうことになる。しかし、「今度は勉強して来いよ！」と温かい声をかけられることもまた多いのである。この声は教員の声よりは心に響くことも多いのではないか。本報告は、やや詳細にわたるが、第一に筆者が企画し、学生に諭すように話し、力説し、自分が長年培ってきた調査地を曝け出す際の気持ちとそこでの留意事項を紹介したい。次に、学生のレポートの一例を引用し、何が理解されたのかを考え、実習のよりよいあり方を考える一助としたい。

Ⅱ. 最初の実習で学生に配布する資料

以下に、最近2年ほど学生に配布して説明している資料を示す。最初に教員の実習と地域に対する想いを記し、次いで大学教育の中での位置づけ、実習の構成と行動上の留意点、更に地域の芯となるような概要、そして実習の行動日程である。

実習への想い：地域構想学科で地域誌を学ぶことは、大学だからこそ可能になる。

地域の課題は基礎科学のみでは解決できない。専門的な知識や技術を、地域特有の特性を理解して、課題の解決に応用する必要がある。地域は総合的なもので、その課題解決は常に応用問題である。ここで、地域特性とは、「これこれこういうものだ！」と言うことは容易ではない。それは、調査の結果を分析・表示し、理解した結果分かることである。諸君に経験と知識は未だ乏しく、合理的な判断も作業もできない。それを学ぶために発展実習はあるのだから。松島湾の核心地域である浦戸諸島は、「極めて豊かな自然と、高齢化し

た漁村、近い将来観光開発が集中的に行われるだろう」という様々な側面を持った地域である。筆者は近い将来、この地域で「松島エコツーリズムを構築したい」と思っている。この発展実習は、実習という側面と共に、この地域での（誰にとって）の観光とはどんなものなのかを考える具体的な資料を作る、実際の仕事という側面ももっている。この実習調査の結果を用いて、地域の将来像をイメージしたい。特に今年は、桂島と寒風沢島を対象とする。

「開発と環境保全がせめぎ合う身近な場所で、調和のとれた地域発展のあり方を考える」

素の姿としての松島が残る浦戸地区は、松島のコアに位置する。このような素敵な地域の実像を捉え、活かす試みを発展実習で行うことができることは、何よりの幸せである。

カリキュラム上で見れば：発展実習は、専門研究への直接的な導入にあたる。また「地域構想学科で学んだ」と就職に際して言えるように、実践的な調査研究の力をつける。3年時以降の演習などで地域調査を実践できるための基礎力養成という位置づけになる。卒論作成では、一定の品質が求められる。品質とは、オリジナリティー、調査の合理性と論理性、収集データの精度の確保、分かりやすく、見やすいレポート構成などである。そこで、発展実習では、卒研のレベルを想定して、教員と学生諸君が協力し、分担して調査報告の完成にこぎつける。

調査地域設定の理由とねらい：地方中核都市仙台の周辺では、開発、環境保全、高齢化など、地域の諸問題が集中している。地域が抱える諸問題を多角的に、比較的身近で、きめ細かに調査できる規模のフィールドとして、ここでは、塩釜市浦戸諸島に焦点をあてる。浦戸諸島は、百万都市仙台という大都市圏にありながら「島海：しまうみ」の、芭蕉や古松軒が愛でた松島の本来の姿が残されており、日本三景松島の中心的な位置にある。仙台から電車で30分という都市近郊にありながら、美しい景観とともに漁業集落の面影を残し、

高齢化が進み、松島の新しい観光地として脚光を浴び始めている。地域の自然環境と社会条件を、植生、地形、気象、景観、土地利用、生業、伝承などの側面から理解し、それらを総合化することを通して、本地域の様々な課題や地域特性を描き出す。これを基礎に、この地域が将来エコツーリズムの対象として脚光を浴びることを想定しながら、地域の開発と保全のあり方を探る。

発展実習の構成と留意点：室内実習と現地調査とからなる。室内実習は事前と事後からなり、それぞれの実習は相互に関連している。無断欠席は、自分の損・不利だけでなくチームの不利益にもなることに留意。「今度の発展実習では何をするのか？」と常に情報交換をしておくこと。どうしても欠席せざるを得ない場合に、データ整理をするような事態もありうる。この発展実習は、実習(学び)でありながら、仕事(一定の水準の成果を求められる)としての側面を持つことにくれぐれも留意してほしい。

事前実習：主に現地で円滑にデータを収集するための準備をおこなう。我々は、まだ調査のプロではない。経験を積まない人間が無邪気に何かをやっても、お茶を濁す程度のことしか出来ないのが普通だ。それぞれのチームで、何を、どこで、どのようにデータ収集するのか、調査で何を、どこまで、どんな手段で、知ることか、取得したデータをどのように処理して所期の目的を達成するのか。これらを緻密にシミュレーションできれば、かなり実力がついたことになる。

現地調査：見学実習と調査実習とに分けられる。見学実習は、現場の人に説明を受け、何かを紹介してもらう場合。調査実習は、現場で聞き取り、観察、観測・計測などを行う。多くの場合、想定のように調査が進むことは稀で、調査では、何をどこまでやるのかは十分に理解しつつも、捲土重来を期すという姿勢が大事。調査の実際は、それぞれの狙いによって異なる。狙いを明確にし、準備を万全にすれば、コンパクトな調査が可能になる。

事後実習：調査結果をまとめる一連の作業である。調査結果を集計したり、整理したりするのが第一段階で、これはできるだけ早く、印象などが薄れないうちに、忘れないうちに行うことが肝心である。まとめたデータを解釈するのが第2段階。すぐに反省し、次の調査で完全を目指すように色々工夫をする。

地域を理解するために

- ・調査項目(地域理解)の枠組み：地域資源、ステークホルダー、周辺環境との関連
- ・地域資源：自然・社会・過去(下記参照)
- ・ステークホルダー：地域住民の考え方、観光業者、観光客、児童・生徒(教育関係者)、行政当局、自然保護関係者
- ・周辺環境関係：インフラの特質、アクセス性、潜在的なアクセス性
- ・基盤情報：地域の自然・文化・産業・景観の魅力と脆弱性を把握する。
- ・個人史を知る：(地域の人々がどんな生活をしてきたのかを聞き取ることを通じて、実感としての地域理解の座標軸を設定したい)衣・食・住・生業の歴史を詳しく聞き取る。

浦戸諸島の島々の地域概要：

塩竈市浦戸地区は、4つの有人島と付属する20あまりの無人島からなる。有人島には、塩竈マリンゲートからの定期船が就航しているが、他の無人島への足はない。これらの島々は、強いて言えば、3つの地域的な特徴を持つ。

第1に、都市圏の離島としての特徴である。仙台から電車と船を乗り継ぎ約1時間で、浦戸諸島に到達する。東京などでは考えられない近接性をもつが、地域の高齢化率は七ヶ宿町や唐桑など県内でもかなりの遠隔地と同じような、もしくはそれ以上の高率を呈する。客観的に言えば、この近接性でこの高齢化は「人口の都市集中による」などといった常識論では考えられない。「船で行き来する」ことの心的な障壁を考えたい。浦戸諸島は、勿論離島振興法の対象であるが、別な見

方をすれば毎日遊びにいける郊外の島々でもある。実際には船の利便性や駐車場の問題など、アクセス性の物理的な距離ではなく接続性・精神的・金銭的な障壁性が課題である。東北随一の観光地にあつて、浦戸諸島は精神的に隔絶されている。

第2に松島湾の核心的な位置に有るということである。松島湾は10km四方の広がりを持つが、人の移動はごく限られた場所に集中している。浦戸は松島湾の外洋と内湾を隔てる天然の障壁であり、中心的な位置にある。湾の中心的な位置に存在することで、地理的にはある程度のまとまりを持ち、且つ隔絶性ゆえに、豊かな自然と穏やかな漁村の生活が保たれている。一帯が「特別名称松島」文化庁所管、「県立自然公園松島」宮城県所管などに指定され、風致地区として景観や自然環境に配慮した土地利用がなされている。

第3に歴史的に大きな遺産を持つ地域である。寒風沢島は、江戸時代における舟運の中心地であつたし、各時代に地域を代表するような人々を

輩出した。また、日本のハクサイ発祥の地でもある。近年までは桂島や寒風沢島での海水浴は仙台市民にとってごく身近な夏の楽しみであつた。

以上のように、地域としての魅力と危うさに溢れたこの地域の特徴を調べ、地域の今と将来を考えることとしたい。

発展実習の回数配分：

フィールド調査・実習は浦戸諸島で3～5回程度実施したい。他に室内作業5～7回、報告会1回を実施する。フィールド調査では、計測・聞き取り・観測・観察・作業などを行う。4・5月には概査と最初の本格調査を各1回、6月に2回程度は現地調査に出かける。7月にも1回まとめの調査を実施する。日曜日などの実施に相応して平日に自習日を設ける。可能性として、7月の土日に1泊2日で集中実習は出来ないか。

実習室利用の留意点：

- ・持参したバッグ類や傘などは、所定収納場所に置き、机上には実習に必要なもの以外の荷物を置

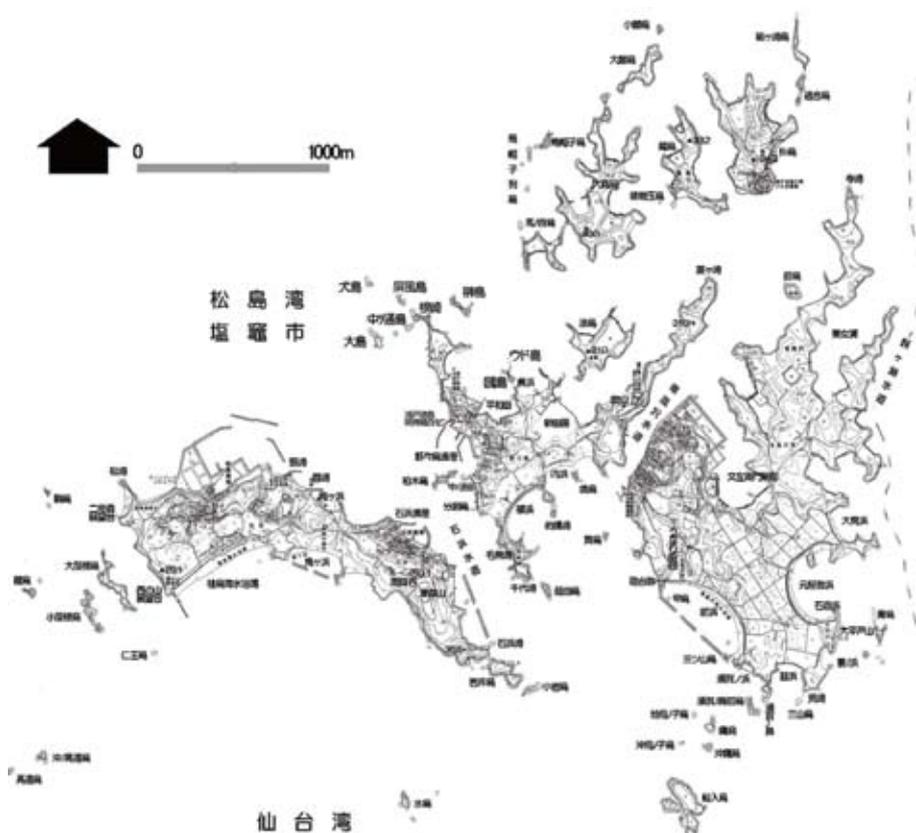


図2 塩竈市浦戸諸島

かないこと。

・実習室は、ほかの実習などで使用していない時間には、使用できる。発展実習の時間内に完成できなかったことや自分で知りたいことに関する資料作成などで利用してほしい。3・4年や1年生がいても、授業以外であれば、部屋をシェアしてうまく使うこと。

・GIS実習室のPC利用：それぞれが自分のPCを決め、他のPCを使うことを避ける。

自分がいつも使っているUSBメモリースティックなどの使用上の注意（特にネット情報などを取り込んだ経験のあるものは、ウイルスチェックをしてから使う。できれば数ギガ以上の新しいものを実習用にそろえると良い。）

発展実習で個人が揃えるべきもの

（実習調査経験が、次の研究の基礎として直結することを念頭において、道具はできるだけ自分で揃えるようにしたい）。

・フィールドノート、調査地とその周辺の地形図（2万5千分の1塩釜など）。

・筆記用具、軍手などのその場で消費してしまうもの。

・その他、あれば良いと自分が思うものは積極的に準備する（例：カメラ、PCなど）。

・調査に際しての交通費（若干の補助を考えています）

・調査の服装は、調査の行き先や内容、相手先を考えて備える。

教室が揃えるべきもの

個々の調査に必要な道具類、観測機器類

・調査道具（調査の際に利用するさまざまな器具類）

・データベース類

フィールドノートについて：

・実習の全てを記録する、とても大事なもの。

・自分のものであって自分のものではない。

・頑丈、コンパクトなもので、ある程度のボリュームが必要。

・教室と異なって、何が起こるか分からないフィールドでの情報を蓄える道具なので、どうし

てもこだわりが必要になる。

特に個人史・漁業の聞き取り調査について：特に今年は、地域の人々の眼差しが何を見て・感じて・どんな生活をしてきたのかにも注目する。下記に記したのは、最初に聞いておくべき項目である。項目をそのまま話すのではなく、自分の言葉に直して、話しかけること。初回は、挨拶が主な任務となる。さらっと概要を聞いて、実習室に持ち帰り、データ化する。そのデータを読み直して、不十分な点があれば、次回以降に補足的な聞き取りを行う。初回のデータの中から、インフォーマントの個人史におけるエポックメイキングが何かを探り、その点を次の聞き取りの際に詳しく話してもらうことになる。

聞き取り調査（インタビュー調査）の留意点

・聞き手の力量が問われる。話す中身が無ければ話せない。

・個人の基本情報を的確に確保する。

・何を深く詳しく聞きたいかを明確化しておく。

・チームで、お互いに聞き取りを疑似練習する。

・インフォーマント（話者）の背景を理解しておくことが必要。

・個人史の聞き取り例を参照する。

・聞き取ったこと確かさを検証する。

・レコーダやその他の聞き操作に慣れておくこと。

・聞き取り調査の成果を印刷して（1人あたり、20ページを目標）話者に報告する。

・個人史編：1回目は、相手の方と知り合いになる。個人の属性を知る。

・属性：氏名・性別・年齢・生年月日・現住所、家族構成（同居しているかどうか）

・概要史：どこで、どんな風に生まれたか（両親とか、何番目とか、生家の家族構成、生家の生業）

小学校・中学校時代のこと：（何処の小・中学校に通っていたか、先生は、クラスの数、児童数、男女比、どんな教室、勉強は、どんな校庭で遊ん

だか、通学の楽しみとか、放課後や休みのときは何をして遊んでいたかなど)

高校時代のこと(行っていれば):(何処の高等学校に通っていたか、先生は、クラスの数、児童数、男女比、どんな教室、勉強は、どんな校庭で遊んだか、通学の楽しみ、放課後や休日にはどんなことをして遊んでいたか、余暇の使い方など)

子供の頃(就学時期)の生活の様子:(家の手伝い、生活の時間の流れ、食事や両親をどう見ていたのか、地域の楽しみとか悲しみの思い出はあるか)

仕事について:仕事を始めたのは何時ごろか、どんな仕事をしたか、仕事についての歴史を聞こう。仕事を辞めたのは何時ごろか。漁業には関わっていたか。農業はやったか。他のサラリーマンなどのような仕事は。

現在の生活:今のよう暮らしになったのは何時頃からか。

島の生活で、子供の頃、若い頃、仕事をガンガンやっていた頃、最近と分けて、それぞれの時代にどんな思いがあるかを簡単に話してもらえたら嬉しい。

景色について:自分の島や浦戸の島々で、いい景色だなと思う場所や思い出の場所は何処か。

島・海・環境の移り変わり:昔(何時頃)と今で何がどう変わった、変わらないかを聞いておく。聞き取り調査のインフォーマントリスト(教員が事前に了解を得た人々のリストがある。)

日程表:

-
- 1・2回 室内実習 担当分担と班編成の確認と現地調査の下調べ。
 - 3回 1. 浦戸諸島に行ってみよう
・目的:野々島おもしろマップ・昨年の報告書などを参考にテーマごとに概査を行おう。出来れば「どんなことが書けそうか」のイメージが少しでも出ればなお良い。
 - 4回 室内実習 本格調査の対策(準備)
 - 5回 2. 浦戸諸島本格実習調査
次回の実習までの間には、初回の調査で得た資料のデータ化に時間をかけること。
 - 6回 3. 浦戸諸島本格実習調査(変更もあり)
 - 7回 室内実習 調査資料整理と関連資料収集
 - 8回 4. 浦戸諸島本格実習調査
 - 9回 室内実習 調査資料整理と関連資料収集
 - 10回 5. 浦戸諸島補足調査
 - 11回 室内実習 調査資料整理と関連資料収集
 - 12回 室内実習 調査資料整理と関連資料収集
 - 13回 室内実習 調査資料整理と関連資料収集
 - 14回 6. 浦戸諸島補足調査
 - 15回 報告会 その後、報告書作成
-

Ⅲ. 現地調査の状況と成果

平成23年度は、東日本大震災により浦戸諸島は壊滅的ともいえる被害を被った。松島湾や塩釜港の津波被害が他地域に比べて軽微なのは、専ら松島湾の湾口を塞ぐように位置していた浦戸諸島が津波の力を受け止め、天然の防波堤の役割を果たしてくれたからであると言われている。この年にも学生と共に現地を訪れはしたが、勝手な調査などを行う気持ちにはとてもなれなかった。その一方で、筆者は足繁く島々に通っていた。島の人々にとって、復興を考えるにも、地域の在り方を再考するにも、長年慣れ親しんだ私は相談相手になる。また、島の人々や学生諸君と、大勢で拵えた

2000m²程の広さのビオトープや物置小屋も津波と震災で大きく壊れ、流され、瓦礫化してしまっており、これを何とか復旧しなければならなかった。この経緯は何れ何処かに記そうと思うが、ここでは平成21年22年に行った調査報告の例を以下に示す。

なお、平成21年度の報告は、既に学科出版物「発展実習 浦戸諸島地誌作成委員会報告」として作成したものからの引用である。

「道 ～桂島～；桂島を歩く～そこから見える島の生活～」
富士原一恵

はじめに

道を調べる意義を次のように決める。道には、人や車などが往来するための所、通行する所という意味がある。そこで道を歩くことによって島の人々の生活を見、発見するために、道とその周囲を調べた。道を調べる方法は、事前に、空中写真に歩く予定のある道を記し、その道を歩くことで、道の特徴や、様子を捉える。更に、写真やメモで実際に把握することとした。

道のあるいてみたら

①展望台をめぐる路：ここには観見月展望台や西

の山展望台などの展望台スポットがある。展望台からは海を、また違った角度からの桂島も見渡すことができる。木の根っこがはりめぐり階段のようになっていたり、畑仕事をしている島の人とも会話したりと森の中の路の景観も楽しめる。

②生活の路：ここは、一人一人が通れるくらいの庭先のスペースを利用してできた、道は島の人だからこそ知る海水浴場までの近道である。島の人々の生活をより身近に感じることができる路である。

③島の海岸通り：海岸通りは、定期船の船着場、船だまり、漁業の仕事場、実に様々な生活の表舞台で、まるで広場だ。島の生活は家と隣近所とこの広場とで出来ているようにさえ見える。道はコンクリートでしっかり舗装され、幅は7mと島の中で一番広い道である。周りには漁業の船が大量に止められ、海の潮の香りを楽しみながら、歩くことができる。

④尾根の道：ここは集落と集落を繋ぐ道で、車通行可で島の中で2番目に太い道である。この道は周りよりも標高が高くなっているため、菜の花畑、海、森、島民の生活を一望することができる。景観を見るなら私は展望台よりも尾根の道をおすすめする。

⑤雨降り石への路：ここは雨降り石へ行く路で、幅60cm程の通る足場のみコンクリートで舗装され、左側は山、右側には崖があり、注意して



図3 桂島の主な道と歩いた道



① 展望台をめぐる路



② 生活の路



③ 島の海岸通り



④ 尾根根の道



⑤ 雨降り石への路



① 和山への道



② 分かれ道



③ 葦原の道



④ 海辺の道

通らないと危ない路となっている。また、歩きやすいように、傾斜の急な所の木と木の上にロープが張られている個所があった。

⑥クモの巣路：道幅も1m程度になり、木に囲まれ、周りは暗く湿気でじめじめとした桂島で一番険しい路といっても過言ではない。行く手には大量のクモの巣がはばかるが、クモの巣から目をそらし、ふと周りを見てみると、植生の変化を楽しむことができる。

まとめ

桂島には、2つの集落がある。それらを繋ぐみちで菜の花畑、森、海、島民の生活や作業などの多くを見渡せる。森の中の道はクモの巣だらけだが、多種多様な植生の変化が楽しめる。桂島の道は、1.どこを歩いても景色が楽しめるみち、2.島民のコミュニケーションのみち、3.玉手箱のようなみちを持つ。

「道 寒風沢島では」 佐藤瑞希

道を調べる意義

道を歩くことによって島の人々の生活を見、発見するために、道を調べた。

調査法

空中写真の判読で、1961年当時と現在の道の分布を概観し、次に歩く予定のある道を設定した。それらは、下の空中写真図にマークした。次にその道を実際に歩き、道の特徴や周辺の様子を感じ取り、更に、写真やメモで実際を把握することとした。寒風沢島の道は、寒風沢水道に面した港の部分：市営汽船の船着場、野々島との渡し舟、漁船の船だまり、商店、民宿、漁協、カキ剥き場などが港の岸壁に面して並び、そこから幅1m程度の細い道が内陸側に通じる。内陸に通じる道は軽トラックが走れる道も2本ある。ここは江戸時代から伊達藩の海運の要衝として栄えた場所で、今でも歴

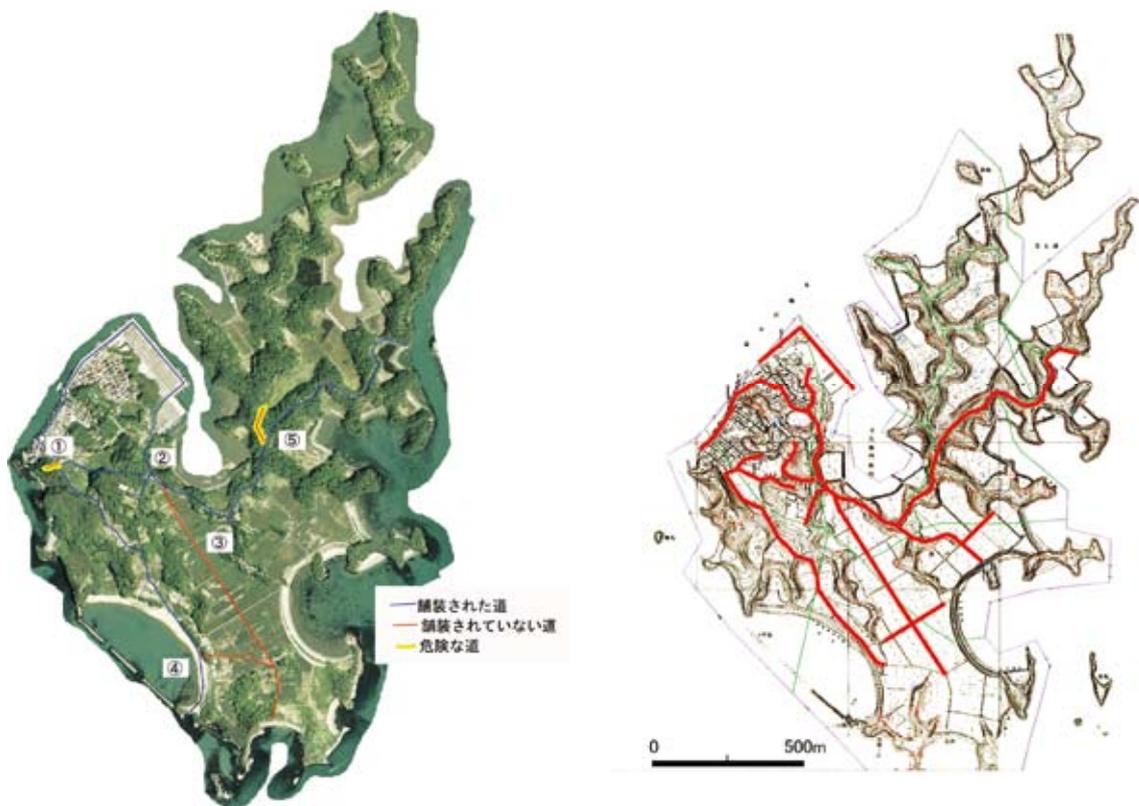


図4 寒風沢島の道（作図方法は図3と同じ）

～寒風沢島の道が見せるいろいろな顔～



寒風沢島のお地蔵様：左から六地蔵・何とか地蔵・化粧地蔵・縛り地蔵



島に咲く草花



怖い感じの道



島の人々と生活

史を語る遺産が随所に見られる。島の奥に通じる道は、軽トラックが走る舗装道路が延びて 宮戸島の集落が目と鼻の先に迫る鰯ヶ淵水道まで達する。島には未舗装の農道が縦横に走る。昭和30年代までは、低地で広く稲作が行われていたために、農道はしっかりしていた。以前は島の小さな入り江にまで田んぼが作られ、森の下草や枯れ木は燃料に利用されていた。農作業や燃料確保のための小さな踏み分け路が縦横に走っていたが、今は主なものだけしか通れない。

主な道の特徴を以下に述べる

①日台山への道：島々と外洋が一望できる日台山展望台へとつづく道である。この下には舗装された生活道路がある。しかし展望台への道は途中急な坂で足場も悪い。手すりがあるとはいえ降雨時は子供やお年寄りには危険である。また途中のぬかるんだ所にブルーシートが敷いてあるがそれによって降雨時は逆に滑りやすくなっている場合があるので注意が必要。道の途中に興味をそそるものはなかったが、その分先に何があるかわからないので登る楽しみがある。

②分かれ道：6人のお地藏様（六地藏）が並んで、道は3つに分かれる。木々囲まれる小道には木漏れ日が射して夏でも涼しげで歩きやすい。分かれ道の1つは小学校跡地へ、2つ目はフジの花が咲く道、3つ目は葦の広がる道へ続く。お地藏様にはお供え物があり、頻繁に島の人が訪れているのだろう。

③葦原の道：舗装されず砂利道である。大量の葦と水田が広がり、風が吹くと葦どうしが擦れ合い音を奏で、心地よく開放感のある空間を生み出す。冬は、尚更カラカラに乾いてなんとも不思議な自然の音を奏でる。自然豊かで美しくとまるで誰もいないかのようだが手入れされた水田や草が生えていない道があるということは島の人々がこの道を利用しているということである。また砂利道の両サイドにシロツメクサなども咲いている。広大な葦原は島の楽園となっている。

④海辺のみち：白い砂浜が広がる。そして防波堤からは日台山展望台からは見られない海の姿を

眺められ、寒風沢島がもつ景観の奥ゆかしさを感じられる。遠くから見ると美しい砂浜・海にしか見えないが、実際に砂浜を歩いてみると所々にペットボトルなどのゴミが捨てられていて素足で歩くには少し危険だと思われる。このような景観をもつ砂浜であるのに観光客等が捨てていったゴミにより美しさが損なわれるのは非常に残念である。

⑤長い道：舗装され、サイドを木に囲まれる。そのため葦原の道幅とほぼ同じであるにも関わらず、開放感はなく少し圧迫感がある。また木が他の道より多いためか植物の種類も多い。徐々にサイドの木々がなくなり道が開けてくると漁に使用する網を干す島の住民や畑が出てきて島の人々の生活を感じられる。高所にある畑を登ると、展望台からでも島を囲む海や島全部は見ることができなかったが見渡すことができる。またこの道には時折地図・赤枠の場所へとつながる道が顔を出し、そこは草に覆われているため一瞬通っただけでは見逃してしまいそうだが、その道を見つけ進んでみると足場はあまり良くないもののちゃんと道はつながっている。いくつか分かれ道があるため迷わないように注意が必要。木が他の道より多いためか花も多く咲いていた。

まとめ

寒風沢島は、寒風沢水道に面した住宅街を一步でると自然が広がる。これは島の人々が自分たちの生活を維持しつつも島の環境を守り大切にしているあらわれである。きっと昔からそのような生活をしてきた島の人々にとって自然を守りながらの生活は当たり前であり、特に意識していないのかもしれない。今回、道を歩くことにより寒風沢島の新たな景色の発見だけでなく、そんな島の人々の生活を感じることができた。寒風沢島の道には、子供にもお年寄りにも優しい道、人と自然が共生できた道、音・景色と新たな発見をさせ感性が磨かれる道があることが分かった。

(聞き取り調査の典型例)

たけよさんの生活を支えるもの
安久津なな, 岩田祥子, 大友萌子

はじめに (大友)

島での暮らしに対するイメージとはどのようなものだろうか。おそらく多くの人は島に対してマイナスのイメージをもっているだろう。「少子高齢化」「過疎」「離島」「独居老人」等、これらの言葉から明るい未来は想像できない。今回の発展実習で私たちの班は、そんな島での暮らしを知るべく、桂島に住む内海たけよさんの生活を追った。

5月から7月にかけて、たけよさんにインタビューをしてきた。たけよさんと話す回数が増えるにつれ、たけよさんが島での暮らしにとっても満足していることが分かった。たけよさんの生活は、統計やデータだけで判断すれば上記のようなマイナスのイメージの言葉に当てはまるものである。しかし、実際に暮らしているたけよさんの感じ方は全く違うものであった。

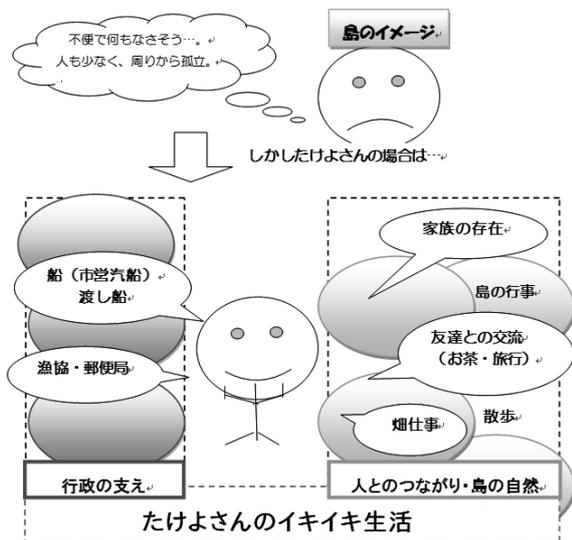


図5 たけよさんの島での暮らし

たけよさんは、島での暮らしに特に不便なことを感じることなく、自分の生活を楽しんでおり、島にずっといたいとも言っていた。そこで私たちは、島にはたけよさんがそのように思える環境が

存在していると考え、その構造を上イメージとして表した。

上記のイメージを見て分かるように、島でのたけよさんの生活を支えるものは、大きく分けると「行政の支え」「人とのつながり・島の自然」であると考え。これらの支えがあって初めて、たけよさんのイキイキとした現在の生活が成立するのだ。はじめにたけよさんの紹介をして、次に「人とのつながり・島の自然」「行政の支え」についてみていきたい。

たけよさんの紹介 (大友)

インフォーマントとして取材した内海たけよさんは、1935年12月21日生まれで、現在75歳のおばあさんである。浦戸諸島の桂島で一人暮らしをしている。一人暮らしとはいっても、島中のお友達といつもお茶を飲んでいるため全く寂しくないそう。私たちがインタビューに訪問するといつもお茶菓子がたくさん置いてあり、アイスコーヒーや緑茶を出してくれた。



写真1 たけよさんとパッチワーク

また、たけよさんは島の生活をとても楽しんでおり、旅行や同窓会、カラオケで一晩中歌うなど、非常にパワフルで面白い魅力的な方である。写真はたけよさんとたけよさんの作ったパッチワーク作品である。また、たけよさんの1日の生活を表にして表した。

たけよさんの家族 (安久津)

息子2人娘1人、孫3人、曾孫2人

現在子供たちは島から出ていき、たけよさんは

6:00 起床, ご飯・片付け
午前 畑・お茶のみ
午後 お茶のみ・散歩
ご飯・片付け, テレビ
21:00 就寝

表1 たけよさんの1日

島で一人暮らしの生活を送っている。お年寄りの一人暮らしというと、孤独で不安が多い生活に思えるが、たけよさんの場合は違う。

息子さんは1週間に1度くらいのペースでたけよさんの家に訪れ、島では手に入らない物資や食糧など、たけよさんが必要としているものは何でも持ってきてくれる。息子さんが来た際には、息子さんが好きな料理を作ったり、孫や近所の人たちが集まったときには家の前でバーベキューをしたりもする。

独居老人という言葉があるが、これにさらに島という条件が重なって、親子間の関わりは薄くなりそうだが、むしろたけよさん親子の場合は周りと比較してみてもその頻度は多く、何かあればすぐに駆けつけることができる距離に住んでいるため、不安なども少ないだろう。「子供たちがみんなよくしてくれるから、とても幸せだ。」と話す。結婚をして、子供が生まれ、孫と曾孫まで生まれて、今が1番幸せだと感じているようだ。

また、たけよさんの方も頻繁に島からでて、孫や曾孫に会いに行っている。常にパワフルなたけよさんの元気の源は、お孫さんたちにあるのかもしれない。

たけよさんと友達（安久津）

たけよさんは、とても活動的で、毎週子供や孫に会いに行く他に、月に1回ほどのペースで友人や近所の人たちと旅行に出かける。それも、県内や近場だけでなく、北海道から九州まで時間があればどこへでも行ってしまい、「もう行くところは行った。」と話す。

年に1回、高校の同窓会があり、そのときには

関東などからも同級生が集まって1泊2日の温泉旅行へ行く。その際はいつも、自家製の海苔を持っていき、「たけちゃんの海苔」と言って喜ばれるそう。この海苔は、昔までは自分の家で作っていたもので、旦那さんが体調を崩したところからは作らなくなり、現在は隣の家で作っている海苔作りのお手伝いする形で海苔に携わっている。海苔作りの仕事は、女4人・男2人くらいで行っていた。12～13人分の家族のご飯作りと、海苔作りで毎日大変だったと言う。また、急な坂道をかごいっばいに入ったりヤカーを押すのが大変である、と海苔に関しては苦勞の思い出が多いようだ。同窓会は今年の5月にもあり、夜は3時ころまでカラオケをして盛り上がった、ととてもパワフルなことが伺える。

今でも一緒に旅行に出かける人に、昔よくたけよさんの家に遊びに来ていた桂島の学校の先生がいる。50年ほど前の当時は毎日のように一緒にお酒を飲んだりしていたそう。そんな、昔からの付き合いが今でも続き、一緒に旅行に行ったりしているのは、とてもたけよさんが人との関わりを大事にしているようで、だからこそ繋がりが強いのだと思う。

また、5年ほど前まで15年間ほど日本舞踊を習っていたそう。このきっかけは、神社の近くの家の方が踊りの先生で、その誘いがあったことからである。島の公民館で、古典踊りや小唄踊り、民謡などを練習していた。定期的に多賀城や塩釜で発表会が催され、親戚や島の人々が見に来ていたという。当時そのような華麗なことができるのはごく稀なことであったため、習わせてくれた旦那さんにも感謝しており、当時のことを思い出して、「あの頃は華だった…」ととても楽しそうに話す。

高校時代を思い出しても、たけよさんはとても楽しそうだった。高校に入学して3ヶ月は、学校の近くの親戚のおばさんの家に下宿して学校に通っていたが、その後は、桂島から船や市電などを使って学校まで通っていて通学が大変だったと

いう。冬はセーラー服に長靴を履いて歩いたという。学校からの帰り道、友達と仙台のお菓子屋さんで甘納豆を買って、それを塩釜までの電車の中で食べるのが楽しみだったそうだ。当時桂島から高校に通っていた女子はたけよさんだけで、学校でも女子の数は少なかったそう。

畑仕事とたけよさん（岩田）

たけよさんは畑をやっており、毎日畑仕事をするのが日課である。また、生活の中での楽しみの一部ともなっているそうだ。野菜は自給自足程度に作っているため買う必要はないとのこと。

栽培している野菜は・・・

大根、玉ねぎ、ネギ、白菜、キャベツ、人参、きゅうり、レタス、芋、さやえんどう、にんにく 等。新しくちがう野菜の栽培に取り組んでみることもあるようで、この話を伺った際にはきゅうりを栽培し始めていた。そのときはまだ芽がでていないとのことであったが…

自分で育てた野菜の成長や、新しい野菜の栽培にチャレンジしてみたりするのも、楽しみにつながっているのだろう。そして、わたしたちが訪れた際には、たけよさんお手製のレタスやたまねぎが入ったサラダを出してくれて、おいしく食べさせてもらった。

畑は一ヶ所だけでなく何箇所かに分けてたくさん持っているが、耕しているのは一部であとは友達に貸しているそうだ。実際に畑を見せてもらっていた際には、隣の畑で仕事をしていた友達と偶然遭遇し、楽しそうに話をしていた（写真1）。また、畑に向かう際にすれ違った友達ともその都度会話を交わしながら歩いていて、たけよさんの交友関係の広さを感じた。この日に限らず畑仕事中に友達とたまたま会ったりすると、そのまま話したり、そこからお茶のみをはじめたりするそうだ。このように友達とは頻繁に連絡を取り合っているわけではなく繋がりを保っている。

“島で一人暮らしをしている”と聞くとさびしそうに聞こえがちであるが、畑仕事や散歩などで多くの人との関わりをもっているたけよさんの生



写真6 景色を眺める2人



写真7 散歩時に見た風景



写真8 散歩時に見た風景



写真9 松崎神社



写真10 坂道を歩く



写真11 散歩時に通った海

活を覗いてみると、その孤独なイメージは払拭された。

畑仕事を毎日午前中に行っているたけよさんだが、単に野菜を栽培する楽しみだけではなく、友達との交流ができる場であるということも楽しみになっているように感じた。様々な楽しみが詰まっている畑仕事は、たけよさんの生活の中でも重要な役割を果たしているように思う。

たけよさんと散歩（岩田）

たけよさんは普段から散歩を日課としていて、1.5～2時間ほども歩くという。歩くコースは島にできているハイキングコースで、たけよさんの家から近い松崎神社の中を歩いて行く。

私たちはたけよさんの散歩に同行させてもらったのだが、思ったよりも距離があり、坂道や足場の悪い道もあるため大学生の私たちですら、汗だくで疲れてしまうほどであった。その時は1時間ほど歩いたのだが、夏場は暑いし予想以上に長く感じた。散歩コースのところどころでは島からの景色（写真9・10）を一望できる場所がいくつもあり、そこでの景色はとてもきれいで、たけよさんも気に入っていた。

ハイキングコースはたけよさんのような地元の人々以外にも活用されている。私たちが歩いていた際にも何組かの外からきた人たちとすれ違った。散歩途中で休憩した際たけよさんは、そのとき出会った見知らぬ観光客の人に、持参したアイスコーヒを振る舞い、そんな姿からもたけよさんの気さくな姿がうかがえた。

たけよさんの友達は足が痛いと言うこともあるそうだが、このような散歩を日課としているたけよさんは、そんなことがないらしい。この散歩はたけよさんの健康にもつながっているようだ。また、たけよさんは普段の散歩を友達と行っているため、友達との会話や情報交換の場ともなっている。そしてなにより、島からの景色をしみじみと眺めるたけよさんの姿が印象的であった。

島の行事（大友）

桂島には大きな行事がいくつかあるが、ここで

は花火大会と神社の祭祀を取り上げる。

まず、花火大会について述べる。花火大会は2日間に渡って行われ、1日目は桂島、2日目は野々島で花火が打ち上げられる。平成22年度の花火大会は8月13日開催である。この花火大会には、島民はもちろん、島の外部からも多くの来客がある。船が増便され、花火に合わせて観光客もやってくる。露店なども出る、島が一番にぎやかになる時期だ。進学や就職で島を出た家族、若者も帰ってくる。島の人たちはこの花火大会をとっても楽しみにしているようである。

この花火大会は、島民と外部の人とのつながりをつくるきっかけになるだけでなく、一度、島を出た人たちが帰ってくるきっかけにもなっていると考えることができる。

次に、島の神社で年に一度行われるお祭りについて述べる。島の神社は松崎神社といい、塩釜神社に縁のある神社である。たけよさんによると、浦戸諸島にある神社は大体塩釜神社に縁のある神社だそうだ。神社の祭祀は9月9日から2日間にわたって行われる。1日目は夜に神社で神主さんに拜んでもらい、毎年当番に当たった4人がごちそうを神社に持ち寄る。2日目は12時頃からお神輿を担ぎ、桂島を回る。このとき石浜の方までは行かない荘そうである。お神輿は島の若者が正式な衣装を着て20人くらいで担ぎ、10軒くらいずつ回る。昔はお神輿の周りを子供たちが着物を着てついて行っていたが、今ではそういうことはない。この日は、お神輿を担ぐ人たちのために島民がごちそうを作って各地で待機している。島は5つの班に分かれており、班ごとにそのごちそうを作るそうだ。たけよさんの家は2班に当たる。

最初にあげた花火大会は、観光客も多く訪れとても華やかなイメージがあるが、一方で神社のお祭りは島民中心で行われる。この他にも、小中学校が合同で行う運動会など、子供たちのための行事もいくつか存在する。島での行事というと、やはり規模が小さく、若い人がいないため活気がないようなイメージがある。桂島も例外ではないだ

ろう。しかし、島の人は島で行われる行事をとて
も楽しみにし、自分たちなりに楽しんでいる。

行政の支え：市営汽船について（大友）

浦戸諸島の島民の生活を支えるものの一つに、
塩釜市が管理・運営する市営汽船の存在が挙げら
れる。この汽船は、塩釜―朴島間を結ぶ、浦戸諸
島の重要な交通手段である。塩釜のマリンゲート
から朴島までの所要時間はおよそ一時間程度であ
る。本数は一日7本程度である。写真14は船が棧
橋に到着するところである。

島の学校に通う子供たち、先生はこの船を利用
している。料金は塩釜から桂島までは500円だが、
通学・通勤用の定期券も販売されており、島の暮
らしに必要な不可欠な存在となっている。船とい
うと、すぐに運航時間がずれるというイメージを持
つ人もいると思うが、私たちが乗船したときはほ
ぼ時間どおりに船が運航されていた。たけよさん
に聞くと、台風のと看や、天候が悪くよっぽど波
が高いとき以外はちゃんと運航されるということ
だった。船の一階は空調が効いており、テレビな
どもあるため、乗船中が退屈に感じられることは
少ないだろう。また、2階席に座っていると、出
航後まもなく大群のカモメたちが出迎えてくれ
る。カモメに見惚れてうっかり指を出していると、
エサだと思われてパクッとされるので注意が必要
である。

たけよさんの場合は、息子さんが七ヶ浜という
近い場所に住んでいるので、出かけるときは迎え
に来てもらうことも多いということだ。息子さん
の都合がつかないときは市営汽船を利用する。

渡し船について（大友）

最初に紹介した市営汽船の他にも、浦戸諸島の
人によく利用されているのが、寒風沢間、石浜間
をつないでくれる渡し船である。この船は地元の
人も一般の人も無料で利用できる。電話すればす
ぐに船頭さんが船にのってきてくれるので、とて
も便利である。この渡し船は浦戸諸島の水上の道
路として機能している。たけよさんはたまに利用
するそうだが、出かけるときは息子さんが自分の

船で迎えに来てくれるので、市営汽船と同様に利
用の頻度は高くない。

漁協・郵便局（大友）

浦戸諸島では、住民に必要な行政の手続き等は
漁協や郵便局を通して行われる。手続き等は個人
で行うのではなく、漁協や郵便局でまとめてあと
で塩釜市に提出するのだ。

取材をしていくうちに、たけよさんをはじめ、
島の人たちからとても信頼されている郵便局の三
浦さんという若い男性の方に出会った。島の急な
坂道を原付自転車でかけまわって島の人たちに郵
便物を届けている。三浦さんは日焼けした肌にあ
笑顔が似合うとても素敵な気さくなかただった。郵
便を届けるだけではなく、たけよさんに手続きが
あるので郵便局に来てくださいと声をかけおり、
島の人と良い関係を築いているようだ。

漁協では、何人かの職員が勤務しているおり、
島の出身の方も多し。塩釜市との連携をとりなが
ら、漁業をはじめとする島の人々の生活を支えて
いる。写真は漁協の入り口である。郵便局や漁協の
他にも、某宅急便会社の配送の方も毎週島に来て
いる。

このように、行政の側から島の生活を影で支え
る人がいるおかげで島の人々は不便なく暮らして
けるのである。

まとめ（大友）

今回、桂島の内海たけよさんに聞きとり調査を
行った。そこから分かったことは、島の暮らしと
いうものは、自分一人だけで暮らそうと思うと大
変不便で、退屈になるということだ。現代に生き
る私たちはなるべく他人に迷惑をかけずに生きよ
うとする風潮があるが、島で暮らしていくにはお
互いに助け合うことが不可欠である。おしゃれな
カフェも、娯楽施設とネット環境の充実した漫画
喫茶も、カラオケもレストランも島にはない。そ
のかわり、心を癒す豊かな自然と人間同士のつな
がりがある。これらは他の何にも代えがたいもの
だ。実際に島を訪れないと分からないかもしれな
いが、この島に住む人たちの多くは、島の人のか

とを家族と同じ様に考えているのである。島の人たちが、多少何か不便に思うことがあっても島にずっといたいと思う理由もこのところにあるのではないだろうか。

また、島で暮らす人々を支える基盤があってこそ、島での生活は成り立っている。具体的に言えば、買い物や送り迎えをしてくれる息子さんの存在や、島の郵便局や漁協の支えが、たけよさんの生活を支えている。このことだけを見ると、一方的にたけよさんが支えてもらっているように見えるかもしれないが、たけよさんも、島の民宿の手伝いをしたり、息子さんのところに行って孫の面倒を見たりと、お互いに助け合って生活しているのである。

島での暮らしというと、報告書の冒頭で述べたように、何をするにも不便というマイナスのイメージがある。しかし、それは自分一人だけで生活することを前提にした場合のイメージである。お互いに助け合い、支え合うようにすれば、たけよさんのように、島の生活はとても良いものになるだろう。

調査報告の例に見られる地域特性の把握状況と教員の関与

富士原・佐藤両名による「道」と題した調査報告を例示した。浦戸諸島を網羅しようとした場合、調査課題は、一般の生活や自然、風物もあるが、このような切り口でデータを作り、自分で歩いて観察した結果を再構成してみるということもありうる。調査項目の決定は学生自身が行った。教員が事前に画像情報や都市計画図の集成作業を行い、両人に面接を行って、道をどのように捉えるか、枝道を見つけるコツなどを伝授した。画像を観察してPhotoshopなどのソフトを用いて道を抽出し、分類図示した。事前の調査は空中写真や都市計画図などを用いた室内作業であり、この部分では協働で作業を行った。道の踏査は当初は二

人で歩き、教員が一度は付き添い、他はそれぞれの友人と行動した。調査報告は写真とともに、それぞれの感性が滲み出て個性的な報告に仕上がった。

大友・阿久津・岩田による「たけよさん」と題した聞き取り調査報告は、一人の人を観察し、聞き取りすることを通して島人の生活感覚をあぶりだそうとしたものである。聞き取り調査を行う相手は、教員が予め、「今度学生が生活などについて聞いていいですか。よろしく願いいたします」という程度の声かけを行い、本人から承諾を得ている。聞き取りにあたって、一般的に言われている離島の生活イメージをステレオタイプとして設定し、それを背景的知識として、ただしそのことに捕らわれることなく、生活感のある実態を把握することに心がけさせた。結果として担当者たちは「たけよさん」が好きになったようである。大学におけるこのような実習において、教員の関与は出来るだけ弱い方がよい場合もある。

地域構想学科の発展実習を私的に総括すると

発展実習は、地域構想学科の基幹的な実習系科目であり、学科教員の大半が前期・後期の何れかを担当する。学生は、教員が明示したテーマと概要を確認して前期・後期其々のテーマを選択する。筆者のテーマを希望する学生は、毎年、定数を若干上回ることからそれなりに興味を持ってもらえているのであろう。学生にとっては、一寸変わった島の世界に行くことに興味を持つもの、海に行くと言うだけで喜ぶ学生もいる。学生の動機は様々だが、本実習の目的が自力でフィールド調査を実行する能力を養成すること、地域の人々との付き合い方を体得することであり、その最低レベルは確保していると思う。調査の実行には、様々な道具を使いこなすことやデータ分析の手法を習得することも必要である。1年次に学習したPCソフトの利用を下敷きにすることも多い。また、レポート作成や図を作成する過程で先輩学生の助力を得ることもある。

実習は学生と担当教員との関係だけで成立してはいない。地域住民の協力も先輩学生の協力もあって成り立っている。より多面的な関係性を受講生がそれぞれに構築することで充実した実習結果に結実する。幸い、浦戸諸島をフィールドとした実習を継続する中で、島民からネガティブな声は聞こえてこない。学生と島民の関係は一応良好なようである。

浦戸諸島の人々と我々の関係は、当初は1教員の現地調査に始まり、ゼミ生の卒論や調査研究経験を重ねる場所となった。その後地域構想学科が創設されてからは1年次科目である基礎実習の体験実習、2年時の発展実習、卒業研究などのフィールドとして関わらせて頂いてきた。その過程では、野々島の新田圃地区におけるビオトープの建設などの作業もあった。これらは、1教員の自発的な行為が出发点にあり、それが大きく発展してきたものである。昨年発生した東日本大震災と津波では野々島の島民から、我々が関わった島の防災マップが避難に大いに役立ったと感謝され、地域の人々と我々の関係は更に深まった。

フィールド調査の実習は、このような長期にわたり且つ多岐にわたる地域との付き合いの過程で実り豊かになると実感している。これは独りよがりだろうか。